会員の広場

麻酔科学教室　特別任命教員教授就任のご挨拶

大阪医科大学　麻酔科学教室　特別任命教員教授　日下 裕介

この度、令和2年4月1日をもちまして大阪医科大学　麻酔科学教室　特別任命教授を拝命いたしました。

私は平成16年に大阪医科大学を卒業し、同年より大阪医科大学附属病院で2年間の初期臨床研修を行いました。この年はちょうど現在の初期臨床研修制度が開始された初年度であり、マッチングなどの新しい制度を含め若干の不安を抱えながらの研修開始であったことが大変懐かしく思い出されます。平成18年に大阪医科大学麻酔科学教室に入局し、その後は枚方市民病院を始めとする当科の関連病院、国立循環器病研究センターなどの専門施設で勉強と経験を積み重ねました。その後平成22年には大学勤務となり、以降手術麻酔と集中治療室での勤務を中心として現在に至っています。

入局してからこれまでを振り返ってみますと、麻酔管理という点でいろいろな変化がありました。超短時間作用性麻薬のレミフェンタニルや非脱分極性筋弛緩薬の拮抗薬であるスガマデクス、新しい鎮静薬であるデクスメデトミジン、新規吸入麻酔薬としてデスフルランも登場しました。こうした新規薬剤は我々の麻酔管理を激変させ、速やかな覚醒と全身麻酔時間の短縮が可能となりました。加えて肺動脈血栓塞栓症の原因である深部静脈血栓症予防のため術後早期から抗凝固療法が開始されるようになり、結果的に硬膜外麻酔の件数が制限され、代用として末梢神経ブロックが数多く施行されることとなりました。

一方で術式に関してはさらにいろいろと大きな変化がありました。これは我々の麻酔管理にも大きな影響を与えました。消化器外科領域では鏡視下手術が食道亜全摘術や肝臓切除術、膵頭十二指腸切除術などの大侵襲様手術に導入されました。心臓血管外科領域で申しますと大動脈瘤に対してステングラフト挿入術が導入され、さらに当院でも数年前からTAVI（経皮的大動脈弁置換術）が開始されて順調に症例数が積み重ねられています。ロボット支援下手術は前立腺全摘術にはじまり、現在は婦人科悪性腫瘍手術、大腸癌切除術、肺切除術にも導入が始まっています。

平成26年には新手術棟と集中治療室が一新され、手術室は20室と集中治療室は16床となりました。この結果として比較的余裕のある運営が可能となり、手術件数や集中治療室の入室患者数は増加の一途をたどっています。特に手術室はハイブリッドルームを2室備え、先述したTAVIや術中CTを必要とする脳神経外科手術や脊髄外科手術が施行されるようなりました。今後は新病棟建設や救命センターの立ち上げなどが控えており大阪医科大学は大きな変化の時期を迎えています。麻酔科としてこの変化に対応できるよう努力していかねばならないと考えています。

麻酔科学教室　特別任命教員教授　就任のご挨拶

昨年は呼吸ECMO管理をふくめ救急医療の勉強のために広島大学救急集中治療科で1年間研修の機会を頂きました。まったくの偶然でしたが、大阪医科大学に帰ったタイミングで当院でのCOVID19患者の受け入れがちょうど開始されました。まさか自分がこれほど毎日肺炎の治療に携わるとは思ってもみませんでした。治療に難渋する症例も多いのですが、これぞ自分の今までの経験がもっとも活かせる機会と思い日々救急科の先生たちとともに集中治療室で奮闘する毎日です。

令和2年4月1日をもって南敏明麻酔科教授が大学病院病院長に就任されたことに伴い、特別任命教授を拝命する形となりました。まことに微力ではございますが、これまで各施設で勉強させて頂いた専門知識をもとに、後輩の指導や教室の発展に努めて参りたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻いただきますよう、よろしくお願い致します。

以前にとある医局の先輩が常々このように言われていたのを思い出します。

「我々は如何なる変化に対しても柔軟でなければならない」。

またこれから先も、昨今のコロナ禍のような想定外の事態が生じ、医療体制が根底から覆るようなことが起きることがあるかもしれません。そんな時にもこの言葉を肝に銘じて、これからも日々精進していく所存でございます。